

親子遊びを通した幼児理解の方法に関する研究

－ 親子関係評価要因との関連から －

大鐘 啓伸

Study on the Method of Understanding the Infant by Watching the Infant Play with the Parent — In Relation to Parent-Infant Relationship Evaluation Factor —

Hironobu OGANE

I 問題意識

保育園では、保育参観日に親子遊びの場面を設定し、子育て支援に取り組んでいる¹⁾。親子遊びの場面では、養育者が子どもの発達段階に合わせた遊びを一緒に楽しむ。親子は遊びを通して、両者の関係性を促進する。保育園の子育て支援において、保育に関わる心理職や保育者は、親子関係を目の前で観察しながら、親子の情緒交流から生ずる行動表現に対して応答的に調律(attunement)²⁾し、親子が共に自らの情緒を語るができるよう共感的に関わっている^{3) 4) 5)}。そのような関わりとは、心理職と保育者が、養育者と子どもの行動表現に互いに応答的に調律し合うことで、情緒的に相互交流していくものである⁶⁾。そのことによって、養育者は子どもと一緒に遊びながら、子どもの成長を喜び、保育者などに自分達の気持ちを分かってもらい、自分自身の成長を実感し、集団の場としてみんなで成長していく感覚を体験する⁷⁾。そして、心理職や保育者の思いが養育者へ、養育者から子どもへという情緒の伝達が生じ、養育者が自分の子どもの情緒を受けとめられるようになっていく^{8) 9)}。調律は共感ではないが、調律によって応答的な情緒の相互交流が生じる^{10) 11)}。また、調律と共感共に感情状態の共鳴とその体験の過程がある¹²⁾。調律はその後、表現への過程になっていくことに対して、共感はその認識の抽出と対応への統合という過程を経ていく¹³⁾。調律は非言語的な交流が必要となる幼児や養育者の気持ちが明確化されていない場合に重要な介入の方法となることに対して、共感心理職や保育者が幼児や養育者の気持ちを明確化し、その感情を互いに認識して共有しようとする介入の方法である^{14) 15) 16)}。そして、親子の遊びを通した支援は、個人と個人との相互作用により生成され続けている関係性に焦点をあてることであり、それは関係性を育むことでもある¹⁷⁾。Stern¹⁸⁾によると、親子遊びを通して両者の関係性を保育者が支援することは、親子が共にあるという間主観的な感受性を育むことである。このようなことから、保育園での共感的関わりは、親子を中心としながら両者の関係性を調律して支援し、親子が共にあるという間主観的な感覚を育んでいくものである^{19) 20) 21)}。

しかし、保育参観日の親子遊びの始めの頃は、幼児の分離不安が幼児の行動に影響するものである^{22) 23)}。幼児は養育者がいなくなるのではないかと分離不安に伴う気持ちが生じ、養育者に密着したり、近くにいたりする。この分離不安の影響は、幼児によって表現される新奇場面での愛着に関連した行動パターンに及ぶものである。このような行動パターンは、「親子関係が安定しているのか」、「分離不安が強くなるのか」、「安心欲求があるのか」、「分離再会場面を再現しているのか」ということが、接触、探索、距離を置くなどの相互関係によって生じ

ている²⁴⁾。

井戸田ら²⁵⁾ および大鐘²⁶⁾ が、新奇場面における幼児の行動を次のように観察している。幼児には、新奇場面の始めの頃、いつもいない養育者がいるけれども、どこかの場面でいなくなるのではという分離不安がある。この分離不安は幼児が養育者に接触や近接という行動を優先して繰り返すことで表現されている。そのため、幼児はいつものように遊ぶことなどできない。これらは、幼児の愛着に関連した行動であり、養育者がそばに居続けることを確認する行動である。そして、幼児は、養育者がきょうはいなくなることなくそばにいてくれるということを確認すると、安心して養育者から離れて遊ぶようになる。つまり、保育園での保育参観日の親子遊びは、幼児にとって、最初は分離不安を生じる場面になっている。しかし、幼児は母親が継続的に幼児のそばにいないことを確認することでいつものように保育園での遊びを楽しむ。そのような保育場面での幼児は、愛着に関連した行動である接触、探索、距離を置くなどの相互関係によって、母親を安全基地²⁷⁾と確認しているのである。また、親子遊びが展開していくにしたがって、幼児の愛着と関連した行動パターンが安定していくことは、愛着を内在化していくという内的作業モデル²⁸⁾ ²⁹⁾ ³⁰⁾の形成を促進していくものであり、さらには、愛着の可塑性をそこに見出すことを示唆するものであろう。

なお、愛着については、Bartholomew³¹⁾ およびBartholomew & Horowitz³²⁾ が成人愛着スタイルに関して、乳幼児期の母子関係においてそのベースが形成されるものであり、親密性の回避と見捨てられ不安の二次元によって幼児の愛着タイプと同様に分類できることが確認されている。乳幼児期における行動と青年期以降の表象とが連続しているということは、青年期以降の愛着スタイルを評価するための親密性の回避や見捨てられ不安といった二軸に対応する要因が乳幼児期にもあることが考えられる。そのような要因について、Stern³³⁾ は、乳幼児と養育者の愛着関係を形成する質を評価する指標である“調律”³⁴⁾と“分離不安 (separation anxiety)”³⁵⁾ ³⁶⁾を挙げている。この調律は親子が情動状態を共有するという情緒的相互交流で、乳児の感情状態の質や量と母親のそれとが応答しているかどうかというものである。Halt & Slade³⁷⁾ およびWinstanley & Gattis³⁸⁾ は、調律が愛着スタイルと関連のあることを示唆している。分離不安は乳幼児と養育者が離れる時に泣き叫ぶなどの行動に伴う苦悩の感情状態で、乳幼児と養育者が情緒的に安心できる関係性を生じさせているかどうかというものである。遠藤³⁹⁾ は、分離不安が乳幼児が愛着に対する不安を回避するために表出する行動であることを指摘している。乳幼児が分離場面において分離を回避する行動を表現することから⁴⁰⁾、それは見捨てられ不安⁴¹⁾と関連しているものである。そして、分離不安は再会場面において抵抗行動をとるために調律の回避を表現することから⁴²⁾、それは親密性の回避と考えることができる。したがって、幼児の愛着スタイルについては調律と分離不安の2次元の軸によって評価されることになるであろう。

そこで、本研究では、保育園が親子遊びの場面における共感的関わりから、親子関係の行動パターンを乳幼児期の愛着の質と関連させ、調律と分離不安の2次元により評価することができるかを調査し、検討する。そのことによって、心理学的側面から保育園の子育て支援についての効果を考察する。保育園の親子遊びの場面における共感的関わりは、親子の関係性における情動を調律させ、そのことによって分離不安を表現することなく愛着の表象を内在化できる内的作業モデルを促進させるという仮説が立てられるであろう。

Ⅱ 目的

保育園で子育て支援として行う保護者参観の際、乳幼児にとっていつもの保育園での生活とは異なり、養育者が幼児の前からいなくなることはなく、乳幼児とともに保育園にいる。この場面で、乳幼児が安定した愛着形成を求められる年齢である場合、乳幼児はいつもいないはずの養育者がいることによって、いつもの保育園での生活と異なった行動を表現する。そのような状況は、幼児にとって分離再会の場面を想起させるものであり、また新規場面にもなっているであろう。そこで親子遊びが始まる。その際に、幼児と養育者との関係性は、調律した遊びをするのか、分離不安の表現をするのかという2次元によって、愛着表現を評価できることが推測される。本研究では、幼児の愛着の質と調律および分離不安との関連を調査するとともに、子育て支援としての保育園での共感的関わりによる親子遊びの展開が親子関係における調律および分離不安にどのように影響するかを検討する。

Ⅲ 方法

1. 調査対象と調査時期

A・B・C保育園の保護者参観で行った親子遊びの場面を調査対象とした。親子遊びへの参加に際して、事前に母親に対して調査のためにビデオ撮影する旨を伝え、母親とその幼児36組から了解を得た。母親の平均年齢は33.7歳 (SD=3.9、最少:28歳、最高:43歳)、幼児の平均月齢は20.9月齢 (SD=2.9、最少:16月齢、最高:25月齢)であった。なお、各保育園の園長に事前に口頭および指導要録で保育士と幼児の関係を確認した。幼児は保育士の言葉かけに適切に応じていることや幼児が保育士に自分の思いや願いを伝えていることなど、幼児は日ごろ保育士に対して安定した関係が形成されていることについて保育の観点から評価されていた。親子遊びで使用した遊戯は、日ごろ保育園で幼児が親しんでいる「音楽 (どうぶつ体操1・2・3、とんとんとんとんひげじいさん)」、「言葉 (絵合わせ、絵本)」、「模倣 (ごっこ遊び)」を30分程度に設定した。母親にはみんなで一緒に遊戯するように教示した。その場面の母親と幼児の様子はビデオで撮影した。なお、親子遊びを調査対象とした理由は、一定の時間内で親子が一緒に課題に取り組む様子から親子関係を観察できるからであった。時期は20XY年Z月であった。

2. 調査内容

(1) 愛着の質の評定 愛着Qソート尺度⁴³⁾を用いた。これは愛着Qソート法・42項目版⁴⁴⁾で用いている項目のうち、保育園児を対象として計20項目から構成された質問紙である。愛着Qソート法は、本来、項目間を比較することによって最終的に項目を7つに分類し、それを点数化していくものであるが、愛着Qソート尺度は、愛着Qソート法の項目を質問紙調査として7段階評価し、その評価結果を愛着安定得点としたもので、両者の相関が確認されている⁴⁵⁾。母親には、親子遊びの当初にこの質問紙の各項目について自分の子どもの行動特徴が「非常によくあてはまる (7点)」から「全くあてはまらない (1点)」の7段階で評定してもらった。

(2) 調律および分離不安の評定 ビデオに撮影された当初の親子遊び「どうぶつ体操1・2・3」(以下、親子遊びⅠ)と最後の親子遊び「ごっこ遊び」(以下、親子遊びⅡ)の場面の母親と幼児の様子を、15名の指導的立場にある保育士によって、次のとおり評定した。

① 親子の調律の様子 調律は、親子遊びの状況で親子の共にある感覚がマッチしていることである⁴⁶⁾。そして、その感覚がマッチしているとは、親子の相互交流において一緒に遊びを楽しんでいる行動が表現されていることである^{47) 48)}。そこで、親子の調律の様子について、親子

遊びを一緒に楽しんでいる状態を5点、まったく両者が楽しく遊んでいない状態を1点として、親子の様子からそのどちらでもないと思った場合は4点から2点の間で評価するように求めた。

② 親子の分離不安の様子 親子の分離不安は、養育者がいなくなるかも知れないと思うことから生じる幼児の分離に伴う苦痛であり、そのことを回避するために幼児が養育者という安全基地を求める行動である^{49) 50)}。また、親子の分離不安に関連して、幼児は養育者がいなくなることはないという予測によって分離の不安を感じることなく養育者から離れていても行動できる^{51) 52)}。そこで、親子の分離不安の様子について、親子が抱っこなど密着している状態を5点、乳幼児が保護者と安心して離れている状態を1点として、親子の様子からそのどちらでもないと思った場合は4点から2点の間で評価するように求めた。

IV 結果

1. 愛着の質の評価結果

愛着Qソート尺度の各項目の平均値と標準偏差は表1のとおりであった。20項目を合計した

表1 愛着Qソート尺度による各項目の愛着安定得点の平均

項 目	愛着安定得点	
	M	SD
1 いったん泣き出すと、激しく泣く（逆）	4.98	1.87
2 ほとんどいつも陽気で快活である	5.56	1.21
3 母親が促すと、初めて会った人に喜んで話をしたり、おもちゃを見せたり、自分のできごとをやって見せたりする	5.33	1.55
4 「～しなさい」と命令として言わなくても、「～したら」と提案として言われただけで、すぐに母親の言うことに従う	4.19	1.28
5 母親が物を渡したり持ってきてくれるように言うのと、従う	4.42	1.75
6 おもちゃに腹を立てることがよくある（逆）	5.22	1.48
7 母親が「ダメ」と言ったり、叱ったりすると、少なくともその場ではしませんがすぐに止める	4.08	1.57
8 母親に対して独立している。一人で遊び、遊びたいときには容易に母親から離れる	4.50	2.14
9 母親に対して我がままが短気。自分の望むことを母親がしないと、ぐずぐず言ったり頑固に要求し続ける（逆）	3.67	1.49
10 母親がついてくるようにいうと、そのようにする	4.53	1.54
11 母親が抱き上げると、母親に腕を回したり母親の肩に手をのせたりする	5.69	1.53
12 母親の行動を見ることによって母親の様々な行動や物のやり方を真似る	4.69	1.55
13 母親と荒っぽく遊ぶ。活発な遊びの中で、叩いたりひっかいたり噛みついたりする（逆）	5.08	1.65
14 機嫌のよい時には、一日中、その状態であることが多い	4.94	1.19
15 すぐに母親に腹を立てる（逆）	5.08	1.36
16 危険そうに見えたり、恐そうに見えたと母親の表情を見て状況を判断する	5.08	1.48
17 望むことを母親にやってもらう手段として泣いたり、ぐずったりする（逆）	4.03	1.80
18 たいていの場合、遊びに使うおもちゃや遊び方は特定の限られたものである（逆）	3.75	1.39
19 子どもがしたいことを母親が面白がったり褒めたりすると、何度も繰り返してする	4.50	1.42
20 何かで機嫌が悪くなると、その場に座って泣く（逆）	4.31	1.98
合 計	93.75	20.76

n = 36 （逆）逆転項目

愛着安定得点の平均値（標準偏差）は93.75（20.76）であった。また、各幼児の愛着安定得点の平均値および標準偏差は表2のとおりであった。

表2 愛着Qソート尺度の幼児の愛着安定得点の結果

No.	M	SD	No.	M	SD	No.	M	SD
1	5.75	1.12	13	5.85	.99	25	4.25	1.16
2	5.50	1.24	14	5.80	.89	26	4.10	1.41
3	5.75	1.41	15	5.70	.98	27	4.30	1.42
4	5.80	1.11	16	4.25	1.21	28	3.90	1.29
5	6.05	1.15	17	4.20	1.28	29	3.80	1.58
6	5.65	.88	18	4.10	1.33	30	4.00	1.62
7	5.80	1.15	19	4.30	1.42	31	4.05	1.61
8	5.65	1.14	20	4.20	1.20	32	4.05	1.57
9	5.60	.94	21	4.10	1.17	33	3.95	1.43
10	5.85	.75	22	4.60	1.43	34	2.55	2.04
11	5.90	.85	23	4.35	1.46	35	2.15	2.47
12	5.75	.97	24	4.35	1.14	36	2.80	2.20

No.は幼児の通し番号

2. 調律および分離不安の評価結果

調律および分離不安の様子の評価点の平均は、親子遊びⅠが表3で、これを二次元に図上に図1のとおりプロットした。親子遊びⅡの評価点の平均は表4で、これを二次元に図上に図2のとおりプロットした。なお、36組の親子の対する15名の保育士の評価の信頼性について級内相関係数を求めたところ、親子遊びⅠの調律は $ICC=.91$ ($p<.001$)、分離不安は $ICC=.95$ ($p<.001$)、親子遊びⅡの調律は $ICC=.94$ ($p<.001$)、分離不安は $ICC=.96$ ($p<.001$)であった。

表3 親子遊びⅠの行動表現についての調律および分離不安の評価結果

No.	調律		分離不安		No.	調律		分離不安		No.	調律		分離不安	
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD
1	4.20	.94	2.20	.94	13	4.00	1.36	1.73	.88	25	3.07	.93	3.20	.94
2	4.53	.64	1.53	.64	14	3.53	.99	2.60	1.06	26	3.00	.99	3.80	.77
3	4.60	.51	1.20	.41	15	3.73	1.03	2.80	1.15	27	3.13	.88	3.40	.74
4	3.60	.83	2.00	.65	16	3.07	.80	3.73	.80	28	3.07	.74	3.60	.63
5	4.13	.64	1.60	.63	17	3.27	.88	3.70	.46	29	2.27	1.10	3.20	.77
6	4.47	.83	1.40	.51	18	3.07	.59	4.13	.83	30	2.40	.63	3.40	.91
7	4.33	.82	1.40	.63	19	3.33	.90	4.53	.52	31	2.93	.96	3.87	.64
8	3.93	.80	1.80	.56	20	3.20	.94	4.20	.77	32	2.87	.92	4.00	.85
9	4.67	.62	1.33	.49	21	3.33	.90	3.20	.68	33	2.80	.56	3.70	.88
10	3.67	.82	2.33	.90	22	3.20	.86	3.13	.74	34	2.47	.99	2.40	.74
11	3.27	1.03	2.47	.74	23	3.07	.70	3.47	.74	35	2.33	.72	2.47	.64
12	3.53	1.06	1.93	.70	24	3.00	1.00	3.67	.82	36	2.80	.77	2.20	.94

No.は表1と同じ親子の通し番号

調律の評価の一致率: $ICC=.91$ 分離不安の評価の一致率: $ICC=.95$

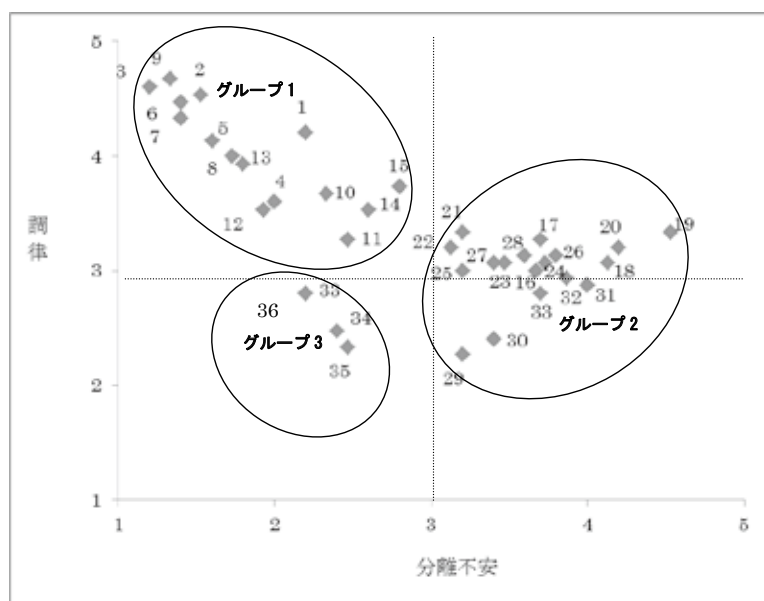


図1 親子遊びⅠの行動表現についての調律および分離不安の評価点にかかる2次元配置の散布図

表3の調律と分離不安の評価点を二次元配置の散布図上に布置した。図内のNoは表3と同じ親子の通し番号。グループ1から3はクラスター分析による分類結果。

表4 親子遊びⅡの行動表現についての調律および分離不安の評価結果

No.	調律		分離不安		No.	調律		分離不安		No.	調律		分離不安	
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD
1	4.53	.64	1.60	.63	13	4.33	.82	1.60	.63	25	3.13	.74	3.07	.80
2	4.67	.49	1.27	.46	14	3.93	.70	2.00	.53	26	3.40	.74	3.53	.64
3	4.60	.51	1.20	.41	15	3.87	.74	2.47	.64	27	3.27	.59	3.27	.59
4	4.00	.46	1.73	.46	16	3.13	.74	3.53	.52	28	3.33	.49	3.47	.52
5	4.27	.46	1.40	.51	17	3.40	.63	3.33	.49	29	2.73	.88	3.13	.52
6	4.47	.83	1.33	.49	18	3.00	.38	3.47	.52	30	2.53	.52	3.20	.56
7	4.40	.63	1.27	.46	19	3.53	.64	4.07	.80	31	3.07	.80	3.73	.59
8	4.07	.59	1.67	.49	20	3.20	.77	3.93	.80	32	3.00	.76	3.67	.82
9	4.67	.62	1.33	.49	21	3.60	.63	2.87	.64	33	2.80	.41	3.73	.88
10	3.80	.68	2.13	.74	22	3.33	.62	2.93	.46	34	2.07	.70	2.53	.64
11	3.53	.83	2.20	.56	23	3.20	.68	3.20	.56	35	2.27	.46	2.60	.51
12	3.73	.70	1.80	.56	24	3.27	.80	3.40	.74	36	2.60	.63	2.40	.63

Noは表1と同じ親子の通し番号

調律の評定の一致率：ICC=.94 分離不安の評定の一致率：ICC=.96

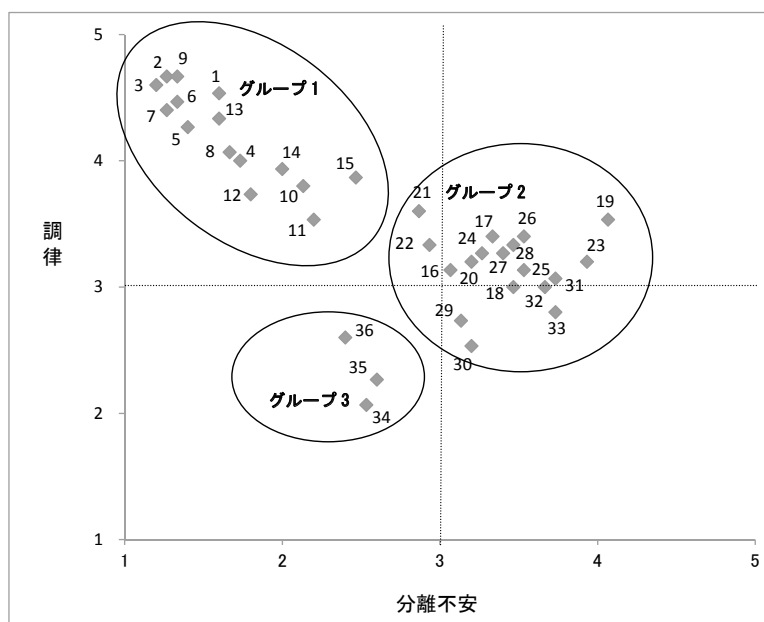


図2 親子遊びⅡの行動表現についての調律および分離不安の評価点にかかる2次元配置の散布図

表4の調律と分離不安の評価点を二次元配置の散布図上に布置した。図内のNo.は表4と同じ親子の通し番号。グループ1から3はクラスター分析による分類結果。

親子遊びⅠの調律と分離不安および親子遊びⅡの調律と分離不安の評価点について、ward法によるクラスター分析をしたところ、それぞれ3つのグループが抽出された。No.1から15は調律が高く、分離不安が低かった。No.16から33は調律が中程度で、分離不安が高かった。No.34から36は調律が低く、分離不安が高かった。

3. 愛着安定と調律および分離不安との関係

愛着安定と調律および分離不安との関連を分析するために、愛着Qソート尺度の愛着安定得点と親子遊びⅠと親子遊びⅡのそれぞれの調律および分離不安の評価点について、Pearsonの相関係数を求めた(表5)。愛着安定は親子遊びⅠの調律と $r=.83$ ($p<.001$)、親子遊びⅡの調律と $r=.89$ ($p<.001$)で正の有意な相関が、親子遊びⅠに分離不安と $r= -.57$ ($p<.001$)、親子遊びⅡの分離不安と $r= -.67$ ($p<.001$)で負の有意な相関があった。

表5 愛着安定得点と調律および分離不安のそれぞれの評価との関連

	親子遊びⅠ		親子遊びⅡ	
	調律	分離不安	調律	分離不安
愛着安定得点	.83 ***	-.57 ***	.89 ***	-.67 ***

Pearson の相関係数 *** $p<.001$ n=36

また、親子遊びⅠと親子遊びⅡのそれぞれについて愛着安定と調律および分離不安がどのように関連しているかをパス解析により分析した。親子遊びⅠは図3のモデルが $\chi^2=.06$ 、 $df=1$ 、 $p=.81$ 、 $RMR=.01$ 、 $GFI=1.00$ 、 $CFI=1.00$ 、 $RMSEA=.00$ で適当な数値であった。調律は

愛着安定との相関係数が.78で分離不安へのパス係数が.70であった。親子遊びⅡは図4のモデルが $\chi^2=.39$, $df=1$, $p=.53$, $RMR=.02$, $GFI=.99$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$ で適当な数値であった。調律は愛着安定との相関係数が.83で分離不安へのパス係数が.73であった。

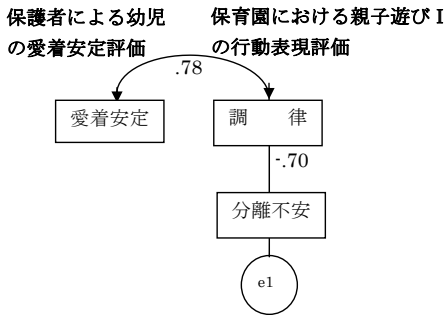


図3 保護者による幼児の愛着安定評価と保育園における親子遊びⅠの調律および分離不安とのパス解析モデル

$\chi^2=.06$, $df=1$, $p=.81$, $RMR=.01$, $GFI=1.00$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$

→はパス係数 ←は相関係数

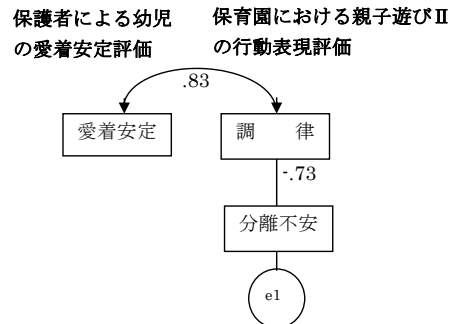


図4 保護者による幼児の愛着安定評価と保育園における親子遊びⅡの調律および分離不安とのパス解析モデル

$\chi^2=.39$, $df=1$, $p=.53$, $RMR=.02$, $GFI=.99$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$

→はパス係数 ←は相関係数

4. 親子遊びの調律と分離不安への影響

親子遊びⅠと親子遊びⅡのそれぞれの調律および分離不安の評価点についてt検定を行ったところ(表6)、調律は $t(35)=6.26$ ($p<.001$)、分離不安は $t(35)=4.73$ ($p<.001$)で、有意に親子遊びⅡの調律が高く、分離不安が低かった。

表6 親子遊びⅠとⅡにおける調律および分離不安の差異

	親子遊びⅠ		親子遊びⅡ		t 値(df=35)	
	M	SD	M	SD		
調 律	3.39	.65	3.52	.69	6.26	***
分離不安	2.81	.96	2.61	.91	-4.73	***

*** $p<.001$ n=36

V 考察

1. 調律と分離不安における愛着スタイル

親子参観日の親子遊びの場面における親子のそれぞれの行動表現を調律と分離不安の2次元で評価した結果についてクラスター分析したところ、3つのグループに分類された。グループ1は、親子関係が調律しており、分離不安の表現の少なかった。Ainsworth, et. al.⁵³⁾によると、分離再会の場面でも母親がいることで安心し、活発に遊びを行なう幼児は、安定型の愛着タイプと分類されることから、グループ1は安定型と思われた。グループ2は、調律が中程度で、ある程度は母親と楽しく居ようとしているが、分離不安を表現する程度が高かった。Ainsworth, et. al.⁵⁴⁾によると、母親との分離に強い不安や抵抗を示し、再会時には積極的に接触を求めるが、なかなか機嫌が直らず、母親から離れて遊ぶことに抵抗を示す幼児は、アンビ

バレント型と分類されていることから、グループ2はアンビバレント型と思われた。グループ3は、調律が低く、養育者と遊戯を一緒に遊んでいる様子がないようであり、分離不安も低く、養育者から離れていることが多かったようであった。Ainsworth, et. al.⁵⁵⁾によると、母親との分離に際してほとんど泣いたり混乱したりすることがなく、母親と関わりなく遊び、母親の接近を回避したりする幼児は、回避型の愛着タイプに分類していることから、グループ3は回避型と思われた。この3つのグループの保育園における親子遊びの場面における親子の行動表現について、調律と分離不安の二次元の要因で評価することによって愛着タイプを分類することが可能であると示唆された。

一方、親子遊びⅠより親子遊びⅡの方が有意に調律が高く、分離不安が低くなっていたことは、親子遊びが展開すると、それぞれの親子の表現される行動について、調律は高くなり、分離不安は低くなっていると考えられた。しかし、その効果は、各親子の愛着のタイプに変化させるまでには至らなかった。これらの結果から、親子の関係性を安定した質へと促進していくためには、保育園における親子遊びを通した共感的関わりを継続的に行うことが必要であると思われた。

2. 愛着安定と調律および分離不安との関係

保育園での親子遊びにおける愛着安定と調律および分離不安の関係は、パス解析の結果、親子遊びⅠと親子遊びⅡともに、調律が愛着安定と関連し、分離不安を低減するものであった。このことから、保育園での親子遊びに三つの効果があると考えられた。一つめは、調律が日ごろの愛着と関連した行動を表現することであった。二つめは、親子が分離不安を表現することがないようにすることであった。三つめは、幼児にとっての新奇場面の分離不安を低減していくものであった。特に、親子遊びⅠより親子遊びⅡの方が有意に調律が高く、分離不安が低くなっていたことは、親子遊びの展開によって、親子がいつもの愛着関係に関連して互いに遊びを楽しむようになっていくことを示唆しているであろう。そして、これらのことから、親子遊びを通した共感的関わりが、親子の調律を促進させ、その場が親子にとってポジティブにいられるような効果を及ぼしていると思われた。そのような効果は、親子が共にあるという感受性を育んでいくものであろう。

3. 親子遊びによって生じるもの

保育園における親子遊びを通した共感的関わりは、養育者が子どもと一緒に遊びながら、子どもの成長を喜び、保育者などに自分達の気持ちを分かってもらい、自分自身の成長を実感し、集団の場としてみんなで成長していく感覚を体験するために、心理職や保育者が幼児や養育者の気持ちを明確化し、その感情を互いに認識して共有しようと介入することで、親子が共に自らの情緒を語ることができるよう関わっていくことである^{56) 57) 58)}。そのような関わりが親子関係にどのような効果があるかを調律と分離不安の二次元の要因によって評価したところ、親子遊びⅠからⅡへと遊びが展開することで、調律を高め、分離不安を低くし、親子関係の質をポジティブにさせていくものと考えられた。また、親子遊びによる共感的な関わりは、パス解析の結果から、日ごろの愛着の安定が親子遊びの調律と関連して、調律を高めていくことが、間主観的な感覚を育むものと思われ、さらに、親子の関係性の質を促進的にポジティブにさせていくことが期待されるものであった。言い換えれば、保育園の親子遊びによって生じているものは、親子関係の調律という親子が共にいることの内的作業モデルであろう。

Ⅵ 今後の課題

愛着形成の初期である乳幼児は、養育者との関係における様々な経験を通して、養育者が自分を受容してくれるのかどうか、自分の要求に応答してくれるのかどうか、といった愛着対象への期待と共に、自分は保護や注意を払ってもらえるだけの価値があるかどうか、といった自身についての主観的な信念、表象を形成させていく^{59) 60)}。このような愛着の形成を保育園での親子遊びによって促進するためには、まず、乳幼児と具体的にどのように遊ぶかを心理職、保育者が養育者に示すことである。次に、親子遊びによって変化する乳幼児の情緒を養育者に伝え、養育者が乳幼児と一緒に楽しんでいる気持ちを大切にしていくことである。今後、幼児期と成人期の愛着の質を評価する二次元の要因の連続性や、幼児期の調律と分離不安の二次元の要因が間接的に成人期の親密性の回避と見捨てられ不安に関連しているかについては、さらに縦断的研究が必要である。また、保育園における子育て支援が親子関係の行動パターンに関わる要因である調律と分離不安の相互作用によって愛着の質を評価していくことについて、より明確にしていくための研究が重要である。なお、本研究は1回という限られた場面のものであることから、定期的な機会を設定して、保育園の親子遊びの効果を縦断的に研究していくことも求められる。さらに、その際に、保育園において養育者が居る場面といなくなる場面のそれぞれの幼児の情緒の変化を、養育者が理解して関われるよう援助し、そのことが家庭での愛着形成を促進させていくという効果についての検討も必要であろう。

文献

- 1) 全国社会福祉協議会 (2008)：新保育所保育指針を読む [解説・資料・実践]。社会福祉法人全国社会福祉協議会。
- 2) Stern, D. N. (1985)：The Interpersonal World of Infant. Basic Books：New York.
- 3) 渡辺久子 (2000)：母子臨床と世代間伝達。金剛出版。
- 4) 大鐘啓伸 (2009)：母子通園施設における障害児とその母親への心理的援助－情緒的交流の視点から考察－。心理臨床学研究、27 (2)、163-173。
- 5) 大鐘啓伸 (2011)：乳幼児健診事後指導教室に関する実態調査研究－心理的援助構造について考える－。心理臨床学研究、29 (4)、420-429。
- 6) Stern-Bruschweiler, N., & Stern, D. N. (1989)：A Model for Conceptualizing the Role of the Mother's Representational World in Various Mother-Infant Therapie. Infant Mental Health Journal, (10) 3, 142-156。
- 7) 前掲書、5)
- 8) 前掲書、5)
- 9) 大鐘啓伸 (2013)：乳幼児健康診査事後指導教室における援助関係－母子が共にあることの感受性を育む－。人間性心理学研究、31 (1)、43-53。
- 10) 前掲書、2)
- 11) 前掲書、6)
- 12) 前掲書、2)
- 13) 前掲書、2)
- 14) 前掲書、4)
- 15) 前掲書、5)
- 16) 前掲書、2)
- 17) 佐々木英和 (2010)：教育学・教育実践の立場から。人間性心理学研究、28 (1)、17-25。
- 18) 前掲書、2)
- 19) 中田基昭 (2008)：感受性を育む－現象学的教育学への誘い－。東京大学出版会。
- 20) 前掲書、4)

- 21) 前掲書、9)
- 22) 井戸ゆかり・園田巖・紺野道子 (2012): 保育の心理学Ⅱ－演習で学ぶ、子ども理解と具体的援助－. 東京：萌文書林.
- 23) 大鐘啓伸 (2012): 保育園の親子遊びの場面における幼児の愛着表現. 日本発達心理学会第23回大会発表論文、557.
- 24) Bamas, M. V., & Cummings, E. M. (1994): Caregiver stability and toddlers' attachment-related behavior towards caregivers in day care. *Infant Behavior and Development*, 17 (2) , 141-147.
- 25) 前掲書、22)
- 26) 前掲書、23)
- 27) Bowlby, J. (1988): *A Secure Base: Parent-child attachment and health human development*. New York: Basic Books.
- 28) Bowlby, J. (1969): *Attachment and Loss*. Vol.1. *Attachment*. London: The Hogarth Press.
- 29) Bowlby, J. (1973): *Attachment and Loss*. Vol.2. *Separation: Anxiety and anger*. London: The Hogarth Press.
- 30) Bowlby, J. (1980): *Attachment and Loss*. Vol.3. *Loss: Sadness and depression*. London: The Hogarth Press.
- 31) Bartholomew, K. (1990): Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- 32) Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991): Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- 33) Stern, D. N. (1995): *The motherhood constellation: a unified view of parent-infant psychotherapy*. Basic Books: New York.
- 34) 前掲書、2)
- 35) 前掲書、29)
- 36) 前掲書、2)
- 37) Haft, W. L., & Slade, A. (1989): Affect attachment and maternal attachment: A pilot study. *Infant Mental Health Journal*, 10, 157-172.
- 38) Winstanley, A., & Gattis, M. (2013): The Baby Care Questionnaire: A measure of parenting principles and practices during infancy. *Infant Behavior Development*, 36 (4) , 762-775.
- 39) 遠藤俊彦 (1992): 愛着と表象 - 愛着研究の最近の動向 - 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観. *心理学評論*, 35 (2) 、201-233.
- 40) 前掲書、33)
- 41) Masterson, J. F. (1972): *Treatment of the Borderline Adolescent: A Developmental Approach*. New York: John Wiley & Sons.
- 42) 前掲書、33)
- 43) 尾崎康子・吉沢あゆみ (2008): 幼児期における愛着と社会的コンピテンツとの関連－ドールプレイ法からの検討－. 富山大学人間発達科学部紀要、2 (2) 、163-174.
- 44) 近藤清美 (1998): 父子関係の行動観察による評価. *家庭教育研究所*、19、89-103.
- 45) 前掲書、43)
- 46) 前掲書、2)
- 47) 前掲書、2)
- 48) 前掲書、33)
- 49) 前掲書、2)
- 50) 前掲書、33)
- 51) 前掲書、2)
- 52) 前掲書、33)
- 53) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. (1978): *Patterns of attachment: A psychological study of Strange Situation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 54) 前掲書、53)
- 55) 前掲書、53)
- 56) 前掲書、3)

- 57) 前掲書、4)
- 58) 前掲書、5)
- 59) 前掲書、29)
- 60) 前掲書、33)

謝 辞

本調査にあたりご協力いただきました園長先生はじめ保護者の方々に感謝申し上げます。

Abstract

The nursery school works on empathic engagement to nurture a secure parent-infant relationship. Factors in the evaluation of the work are attunement and separation anxiety. This study, aimed to prove the parent-infant relationship evaluation factor in the nursery school, to investigate the relationship of the factor with the empathic engagement by watching the infant play with the parent. First, the parent who participated in the open-school day filled out an inquiry on the infant. Then, we watched 36 infants play with either parent and recorded the occasion with a video camera to analyze the parent-infant relationship by attunement and separation anxiety. The relation between attachment, attunement and separation anxiety was analyzed. As a result, attunement was related to attachment and reduced separation anxiety. In addition, the development of parent-infant play raised attunement and lowered separation anxiety. Concerning the empathic engagement determined by watching the infant play with the parent at the nursery school, we confirmed that it promoted the parent-infant relationship with quality of the attachment as a factor for attunement and separation anxiety.

Keyword : Parent-infant relationship evaluation factor, Attachment, Attunement, Separation anxiety

キーワード : 親子関係評価要因、愛着、調律、分離不安